

## 巻頭言

### 技術の伝達

Technology Communication



常務執行役員 稲本 信秀

Nobuhide Inamoto

「シートに座り込むと、十分な広さを実感、シートはほどよく硬く、フロントビューは開放感を覚える。助手席の足元空間も狭くない。走行性能は衝撃を受けるほど素晴らしいとしか言えないものであり、すご過ぎる。これがマツダの掲げる“Zoom-Zoom”なのかと痛感した。これは新型デミオに関し、お客様相談室に寄せられたお客様からの生の声の一つ。このようなお客様が満足されている情報は、胸が熱くなるほど嬉しく読むことができる。

しかし、同時に様々な形で苦情のフィードバックを受けるが、この時はなんとも情けない気持ちになり胸が痛くなる。

常に、お客様の期待に応え期待を上回り、満足して頂けるクルマを提供し続けたい。

一方で、企業を取り巻く環境は大きく変化している。その代表的なものとしてCSR（企業の社会的責任）への世界的な関心の高まりが挙げられる。企業は、これまでのように自らの事業活動にだけ目を向けるのではなく、CSR活動によって社会に対して新しい価値を創造しなければ持続的に発展できない、というものである。つまり企業は、社会問題や環境問題の解決に積極的に貢献することも強く求められている。

地球温暖化への対応もこの喫緊の課題のひとつであり、二酸化炭素など温室効果ガスの削減を先進国に義務づけた国際協定「京都議定書」の約束期間が今年から始まった。また、昨年末の国連気候変動枠組み条約第13回締約国会議（COP13）では、「ポスト京都」つまり2013年以降の温暖化対策の枠組み交渉の進め方をまとめた行程表「バリ・ロードマップ」に各国が合意した。

マツダも様々なCSR活動を推進しているが、その一環として昨年、技術開発の長期ビジョン「サステイナブル“Zoom-Zoom”宣言」を公表した。これは、お客様が「見て乗りたくなる、乗って楽しくなる、そしてまた乗りたくなる」といった気持ちになるような魅力的なクルマの開発を進める一方で、環境・安全技術の開発強化を図って持続可能なクルマ社会の実現を目指す、という宣言である。

そしてこの「サステイナブル“Zoom-Zoom”宣言」の下で開発された第1弾が新型デミオであり、第2弾が新型アテンザである。

このマツダ技報第26号には、この新型デミオと新型アテンザの特集が生まれ、それと同時に環境・安全に関する多くの論文・解説が掲載されている。まさに「サステイナブル“Zoom-Zoom”宣言」のマツダ技報初号と呼んで良いであろう。

マツダが、自らの事業を成長させ続けるためにも、お客様に満足して頂けるクルマを提供し続けるためにも、CSRに真摯に取り組んでいる企業であると社会から認めて頂けるためにも、その根幹を支配するものは「技術」であるということに疑う余地も無い。お客様や社会の期待は多くの矛盾を生み技術の高度化や複雑化を要求することとなるが、それをブレークスルーする技術開発こそがその矛盾を解く鍵と成り得る。例えば、二酸化炭素排出削減は事業活動を制約する成長阻害要因であるとの認識がこれまでは強かったが、緑を生む環境技術で先行すればもう一つのグリーン（ドル紙幣）も生み出せるという Green is Green という言葉も使われ始めた。このように、技術開発の可能性が考え方を変えるし、考え方が技術開発の可能性を生む。

技術は要求される機能や制約条件の変化によって時代と共にダイナミックに変化するものであるが、ある日突然に実現できるものではない。先人・先輩が育て積み重ねてきた技術を基盤として、その上に我々の努力があって初めて実現できるものである。我々は高き志を持って技術開発に臨まなければならないが、その前提として、先人・先輩の技術をしっかりと受け継ぐ必要がある。

その意味において反省と不安がある。我々は、先人・先輩の技術をしっかりと理解し、その上に技術を積み重ねているであろうか。我々は、自分たちの技術を後輩に的確に伝達しようとしているであろうか。様々な場面でこの技術の伝達に不安を覚える。

技術への要求は高度化・複雑化し、技術者への負担が大きくなったので、分業化したりマニュアル化したりして効率化を追求してきた。このことは、決して非難されるものではなく必要なことであり、多くの成果も生んできた。しかし、このことが過度になり、また狙いから外れてしまうと、技術者は全体が見えなくなるし、考えることもしなくなる。技術者への仕事の与え方を、技術の伝達という側面からも十分に配慮する必要がある。また同時に技術者も、基本を大切に、先人・先輩からの技術を素直に受け入れながら技術開発に努め、更にその積み重ねを的確に後輩に伝達していくことを強く意識する必要がある。

この技術の伝達という課題に対する答えのひとつは、平素のコミュニケーションのあり方の中にあるように思う。近年、Eメールの活用が氾濫し、直接顔を突き合わせてのコミュニケーションも少なくなった。直接顔を突き合わせ、刹那的に表面上の会話に留まることなく、モノの原理原則や、先人・先輩が積み重ねてきた技術の中身にまで立ち返った会話をするので、お互いに、技術の伝達の大切さが痛感でき実践できるのではないだろうか。現地現物を基本とし、平素のコミュニケーションを大切にしていきたい。Mazda Quality 5つの質の基盤である我々一人ひとりの行動の質の重要性をここでも強調しておく。

勿論、本誌（マツダ技報）のようなものも技術の伝達に欠かせないものである。先人・先輩が積み重ねてきた技術の上に開発された技術が本誌に掲載されており、本誌によっても後輩に技術が伝達されていくことであろう。今後、今以上にマツダ技報が充実し、技術の伝達に大きく貢献することを期待し、巻頭言とする。